

映画時評「戦場のピアニスト」(The Pianist)

盛田 常夫

アカデミー三賞の群像

2002年カンヌ映画祭のパルムドール賞を受賞した *The Pianist* (日本上映題名「戦場のピアニスト」)が、アカデミー賞の三部門を受賞した。ロマン・ポランスキー (Roman Polanski) が最優秀監督賞、エイドリアン・ブローディ (Adrien Brody) が最優秀主演男優賞、ロナルド・ハーウッド (Ronald Harwood) が最優秀脚色賞に輝いた。

ポランスキーの父はポーランド系ユダヤ人、母はロシア人でユダヤの血が混ざっている。フランスのパリで生まれたが、反ユダヤ主義が勃興したため、ポランスキー一家はロマンが3歳の時にクラコフへ移住した。両親はロマンが生まれる1年前の1932年に結婚し、母はアウシュヴィッツの収容所で妊娠4カ月の身重のままガス室で殺害された。

ポランスキーは1960年代のアイドル女優だったシャロン・テートを二人目の妻に迎えたが、翌1969年のシャロンが妊娠8カ月の時に、ハリウッド・ヒルズのマンションでチャールズ・メイソンに属する狂信的な男に殺害された。母の死に続く、ポランスキーの二度目の悲劇であった。当時、このニュースはアイドル女優の猟奇的殺人事件として、世界に報道された。

スピルバーグはこうした悲劇に遭遇してきたポランスキーに「シンドラーのリスト」の監督を依頼したが、その内容があまりに個人的かつ苦痛であると断った経緯がある。ポランスキーは今回の授賞式に出席していないが、それは1978年の未成年少女への性的ハラスメントによって、米国への入国が禁止されているからである。

ブローディはアメリカ生まれのアメリカ育ちだが、父がポーランド系ユダヤ人で、母はハンガリー人の著名な写真家、シルヴィア・ブラッキー (Sylvia Plachy) である。ブラッキーは1943年にブダペストで生まれ、1956年にアメリカに渡った。学校時代にハンガリー出身の写真家アンドレ・ケルティース (André Kertész) に出会ったことが、写真芸術に向かうきっかけになった。1884年生まれのアンドレ・ケルティースは1912年にパリに移住し、そこから1937年にニューヨークに移った。ライカの35ミリカメラを持って、フリーランスのカメラマンとして再出発し、ニューヨークを拠点とする写真家として名声を高めることになった。ブラッキーはそのケルティースとニューヨークで出会い、写真家になる道を選択した。アメリカに育ったブローディはハンガリー語を話せないが、母ブラッキーと度々ハンガリーを訪れている。

ハーウッドは英国を代表する現代の戯曲作家である。1934年にケープタウンで生まれた。1989年から1993年までイギリス・ペンクラブ代表、1993年から1997年まで国際ペンクラブ代表を務めた。1995年に上梓した戯曲 *Taking Side* はドイツの作曲家フルトベングラーとナチをめぐる思想的かつ心理的な葛藤を抉る作品で、ハンガリーのアカデミー賞監督

サボー・イシュトヴァーンが2001年にこれを映画化したことで知られている。その映画解説は『パブリカ通信』臨時号(2002年8月)を参照されたい。

あらすじ

主人公のシュピルマンはワルシャワ・ラジオの常連ピアニスト。彼と家族の運命はドイツ侵攻によって、悲劇的な結末を迎える。1939年のナチス・ドイツのワルシャワ占領で、ワルシャワ市内にユダヤ人ゲットーが作られ、シュピルマンが姉弟や両親とともにゲットーに隔離される。しかし、1942年に姉や両親は強制収容所へ向かう列車に乗せられワルシャワを去る。女性や老人は強制収容所で処刑される運命にあり、若い男性はワルシャワのゲットーに留め置かれ、建設労働に従事させられる。

シュピルマンは家族と一緒に強制収容所送りになるところ、知り合いのナチス親衛隊の隊長が列車に向かう列の中からシュピルマンを引きはがし命を救うが、ワルシャワの強制労働集団に入れられる。強制労働集団内部で反ナチの秘密組織が活動しており、蜂起の準備が行われる。蜂起が近づいたある日、秘密組織メンバーの助言に従い、シュピルマンはゲットーから逃亡を図り、幾人かの知人やサポーターを経由して、隠れ家となるアパートに潜む。

やがてワルシャワ市街で対ナチへの蜂起が始まり、連合軍の空襲も始まる。騒然とした状況の中、隠れ家になっている建物へのナチの砲撃が始まり、さらなる逃亡を余儀なくされる。シュピルマンは瓦礫になったワルシャワの街を転々としながら、破壊された家屋の屋根裏部屋に落ち着く。廃屋の中で食料を探している時に、若いドイツ人将校と出くわす。短い会話の中で、職業を聞かれ、「ピアニスト」と答える。その将校はシュピルマンに、ピアノ演奏を促す。演奏の後、将校はシュピルマンに食料と外套を渡し、立ち去る。

しばらくして、ワルシャワは連合軍によって解放され、ドイツ人将校は敗走の途中、捕らえられ、捕虜となる。

テーマ

題名「ピアニスト」はこの映画の主題が音楽あるいは音楽家だということを暗示している。筆者もまた、それを期待した。確かに、物語は実在のピアニストであるシュピルマンとその家族の運命なのだが、映画の9割はユダヤ人スピルマンのワルシャワでの出来事を綴っており、音楽がテーマになっているわけではない。ドイツ人将校との出会いの場面がこの映画の売り物なのだが、映画の全体的な流れからすると、このシーンはナチからの迫害の過程で出会った一つのエピソードにすぎない。その出会いが物語を展開しているわけではない。したがって、音楽が主題だと考えると、期待外れになる。朝日新聞の映画批評で、ある音楽評論家が「廃屋のピアノから響くのは調律されていない音であるはずなのに、映画のピアノは完全に調律されていて、現実的でない」という趣旨の批判を寄せていた。確かにその点は不自然さを免れず、映画のリアリズムを損なっているが、逆にそのことが、

この映画の主題が音楽にないことを示している。

それではこの映画のテーマは何か。明らかに、「ホロコースト」である。ドイツ占領から解放までのワルシャワ・ゲットーを克明に描いた映画である。そのリアリズムは聴衆を震撼させるに十分である。過去の歴史的後景に流れ去りつつあるナチス・ドイツの蛮行を、若い世代が体験できるという点で、優れた作品だといえる。

他方、ハーウッドの *Taking Side* と比較すると、何か物足りなさを感じる。サボー・イシュトヴァーンが映画化した *Taking Side* はナチスと音楽家との葛藤を描くもので、派手な映像はないが、尋問の迫真性を見る者の生き様までも問う厳しさをもっている。しかし、このような映画は現代のハリウッド映画には向かない。厳しく思想を問うという姿勢や内容は、娯楽中心の世界の間尺に合わない。ハンガリーでの上映も、すでに打ち切られている。残念なことである。

ヨーロッパとユダヤ人問題

それにしても、第二次世界大戦が終わって 60 年にもなろうというのに、依然として、ナチスのホロコーストが芸術や思想の主要なテーマとして生きている。昨年のノーベル文学賞のケルティースの小説も、ナチの強制収容所が舞台だった。明らかに、ヨーロッパ社会がユダヤ人問題やナチス・ドイツによる虐殺を忘れて共存していけないことを教えている。それはたんに民族の共存だけでなく、ヨーロッパ社会が存続していくための思想的倫理的な問題なのだ。その再確認が繰り返し行われているのだと考えれば良い。

そのことは、対イラク攻撃にたいするヨーロッパ諸国の反応にも現れているが、その対応は一樣ではない。ヨーロッパ諸国の中でも、ポーランドは英国とスペインとは違った意味で、アメリカの対イラク攻撃支援で突出している。英国は石油メジャーの利害と EU 内部での特殊な立場（ヨーロッパ大陸から離れた島国で、かつ米国を生み出した母国）に規定されているし、スペインは首相のスタンププレーであるが、ポーランドの対イラク攻撃支援政策は明らかに、500 万人とも 700 万人ともいわれる在米ポーランド系ユダヤ人の意志が反映している。さらに複雑なのは、現在のポーランド大統領も首相も、旧体制時代のエリート共産党党员だったという事実である。たんに支援を表明するだけでなく、戦闘要員を送るという選択をおこなった現在の政府の決定はどのような政治的意思あるいは思想的な意思にもとづいているのだろうか。個人的なスタンププレーとして 8 カ国声明に署名したチェコやハンガリーと違い、ポーランドは最初から確信犯なのだ。このポーランドの姿勢に、対ドイツへの対抗心やアラブ世界への蔑視が見え隠れすると考えるのは、筆者だけだろうか。

もっとも、政府の決定とは異なり、ポーランドでも世論の 6 割が対イラク攻撃反対なのは救われる。それにしても、ポーランド出身のローマ法王をいただき、ローマカトリックが強い影響力をもつポーランドで、法王の戦争反対を押し切って、政府がイラク攻撃を積極的支持する本当の意図はどこにあるのだろうか。

受賞スピーチ

対イラク攻撃開戦直後のアカデミー賞授賞式は波乱に満ちていた。アメリカの銃社会を告発するドキュメンタリー・フィルムで、最優秀ドキュメンタリー賞を獲得したムーア監督は、激しいアジテーションで、ブッシュを批判した。「ニセの選挙で選ばれたニセの大統領よ、ニセの戦争の恥を知れ」と。会場は騒然としていたが、核心をついた発言だった。もっとも、会場で一番好意的に受け入れられたスピーチは、映画の体験にもとづき、戦争の悲惨さを訴えたエイドリアン・ブローディのスピーチだったと報道されている。

それにしても、多くの受賞者が自国の対イラク攻撃に反対スピーチをしたのには、それなりの理由がある。今、アメリカのブッシュ政権は、ネオコン（ネオコンサーヴァティブ）と呼ばれる超タカ派グループが牛耳っている。この現象を1950年代初めのマッカーシズムによる左翼・進歩的知識人や芸術家のパージと重ね合わせ、芸術への政治の介入を危惧する映画人が多いということだ。

それに比べ、ポーランドやハンガリーの旧体制エリート政治家の腰の軽さはどうだろう。彼らの軽さは、彼らの思想転向の容易さを象徴している。もっとも、旧体制時代から確固たる思想を持っていなかったと考えた方が、良く理解できるかもしれない。

日本の特殊性

さて、このような状況下の日本はどうだろう。ドイツがこれでもかこれでもかと「ホロコースト」を批判され続け、ドイツ自らもその贖罪に努力しているのにたいし、日本はどうだろう。「いつまで昔のを取り上げるのか。賠償で片が付いているではないか」と、中国や韓国の批判に取り合わない。日本の外交政策を取り仕切ってきた自民党のタカ派に、日本の軍国主義への反省はない。小泉首相だって、経済政策ではずるずる後退するのに、靖国参拝とアメリカ支持だけは頑強に堅持している。だから、保守本流は安心できる。

東京裁判で戦争犯罪者が処罰されるはずだった。しかし、アメリカの戦後政策の転換で、戦争遂行の最高責任者である天皇の戦争責任が問われることなく、一切の責任は一握りの軍人に押しつけられた。一億総無責任化の始まりである。そして、極刑を逃れた小物の戦犯が刑期を満了することなく出所し、公職に復帰し、戦後の政界を牛耳り、それらの人々が戦後日本の政治と外交を担ってきた。

国民もまた、一部の軍人以外は「被害者」なのだという錯覚に陥った。原爆投下もまた、アジアへの加害者から「被害者」への意識錯覚を助長した。国民がアジアへの加害者としての責任と意識を喪失しただけでなく、戦犯政治家が主導するアメリカへの政治的軍事的従属はアメリカ一辺倒の卑屈な外交姿勢を定着させてしまった。小泉首相のアメリカ無条件支持の絶叫は、おかしくも悲しくもあるが、これが日本の姿だ。絶叫しなくても、皆分かっている。誰も驚いたり注目したりしない。

もっとも、アメリカを支持しなかったら世界に大きな驚きをもたらし、日本を見直す転機になっただろうが、どうころんでも今の日本がアメリカを立てる道化師の役割を超える

ことはできない。経済力は注目されても、国際政治や知的モラルで、日本はアメリカ以外の世界から相手にされていない。お金以外に日本からは何も期待されていない。アメリカの指導者も、内心、そう思っているのだろう。

(2003年3月31日)